“犬も猫も仲間守ってやらなければ”

PROFILE

稲垣冨美子
(有) 名古屋清掃代表取締役、
当協会理事。
出身／岐阜県生まれ
血液型／A型
信条／おこるな、いばるな、あせるな、
くさるな、まけるな
夢／残された一生を元気で、
ボランティアに、仕事に、
好きな言葉／心はいつも豊かに、自然体で
嫌いなこと／無関心

FUMIKO INAGAKI

会員の方々の楽しい名人（迷人？）ぶり、達人ぶりを披露していただいてきた名人・達人評判倶楽部も第5回を迎えます。今回は当協会の理事を務める（有）名古屋清掃の稲垣社長に登場していただきました。はじめての女性登場に、インタビュアーの花井さんはどのように切り込んでいくか……。

一生懸命がんばる人を応援するのが好きです。

――このコーナー初の女性登場ということで大変楽しみにしてまいりました。

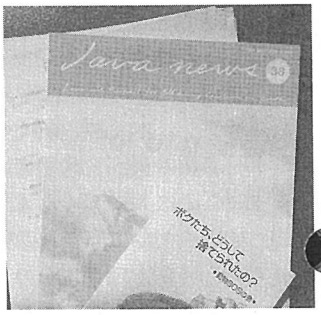
稲垣社長（以下稲垣に略）『わぁ、どうしましょう（笑）。これねぇ、名人・達人評判倶楽部って書いてあるでしょ。変人・奇人評判クラブだったら、私なんかピッタリなんですけどねぇ。』

――何をおっしゃるんですか（笑）。幅広い趣味を持って、いろんな活動をなさってるって評判ですよ。絵もご趣味のひとつだそうですが（壁の稲垣社長の肖像画に注目して）。

稲垣『あぁこれはね、ウチの社員が描いてくれたんですよ。なかなか感じ出てるでしょう。』

――あちらの絵は清掃車ですね。深みのある色で、しかもお仕事してる人の雰囲気がよく出てますね。社長の作品ですか？

稲垣『（笑いながら）いいえぇ。あれは孫が描きました。今年14歳の。この子もすごく絵が好きでね。私も女学校時代から好きだったんですけど、あの頃は絵を描くような時代じゃなかったですよ。今は絵を見るのが好きですけど、だめですね、専門的じゃないから。好き嫌いが激しいんですよ。見方も変わってきますしね。』



――今はどういう絵が好きですか。

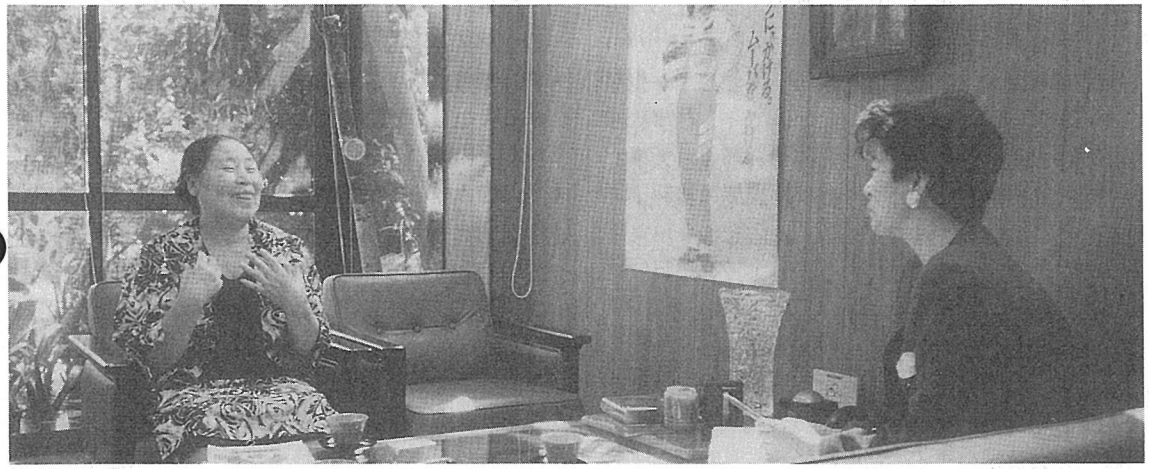
稲垣『楽しい絵、明るい絵がいいんですねぇ。以前は深みのある、落ち着いた絵が好きだったんですけどね。もう今は重い絵はどうもねぇ。』

――好きな色っていうのも変わりますよね。人間の生理なんかに非常に関係しているらしいですが。

稲垣『それはありますね。結局、緑へいくんじゃないですか。』

――緑っていうのは、イキイキとした生命力を表しますよね。自然の力というか。

稲垣『そうしたものを身の回りに置きたくなるんですね。（あちこちに置かれた観葉植物や窓の外の



庭木を指さして）これ面倒なんですよ。お守りがね。でもね、あるとないとでずいぶん気持ちが違います。枯らしたことないし、枯らすことはできませんね。』

――育っていくっていうのが、楽しみですし、自分の中にも活力が涌いてくるんじゃないですか。育てる楽しみといえば、社長は、大きな可能性を持ったこれからの方達を応援したり、支援したりなさってますよね。

稲垣『そうですね、それも緑を育てることと似てるのかも知れませんが、困ってる人を見ると放っておけないんですよ。何かを目指して一生懸命やってるけれど、こういうことで困ってると聞くと、何とか夢を実現させてやりたくなるんですね。』

――ル・マン完走で名を馳せた、吉川とみ子さんのポスターがありますが……。

稲垣『この子は娘の友達でね、ホントに頑張り屋さん。私も精いっぱい応援しました。彼女がル・マンに出るためにライセンスを取る時も、時間はない、お金はないで、ホント大変でした。でも今はたくさんスポンサーもつきましたでしょ。もう安心です。』

――社長は人を応援するだけでなく、犬や猫も、それも捨てられた犬や猫を引き取って面倒を見てらっしゃるとか伺いましたが。

稲垣『会社のこの上にもいるんですけどね。この間そのハスキーが逃げましてね。見つかったから良かったものの、もうガリガリにやせてました。ハスキーは性格がいいんですよ。本当にかわいいんです。でもねぇ、広々としたところを走り回ってた犬でしょう。日本の住宅で飼うのは無理なんですよ。油断もスキもあったもんじゃない。』

――逃げたハスキー犬が時々新聞なんかを賑わしてますね。食堂へ入っていって、お客さんの定食を全部食べちゃったとか。でも逃げたんじゃなくて、飼うのが大変になって捨てていくっていうのも結構ありますよね。

稲垣『それなんですよ。あまりにも無責任な人が多過ぎます。犬や猫は一度飼えば家族です。ペットではなく仲間なんですね。それを捨てていくというのは人間としてどうでしょうか。』

動物実験廃止を求める会を名古屋で設立しました。

――そうした動物を救済する会を作って、活動なさってるんですよね。

稲垣『えぇ、一昨年の11月、名古屋で会を作りましてね。会自体は前からあったんですが、まぁ、本格的な活動の旗揚げといったところでしょうか。私

のところはね、仕事の関係で、動物実験で死んだ犬なんかを集めてたんですよ、むかし。もうそれがつらくてつらくて。けれども仕事は仕事として一生懸命やらなきゃいけないでしょ。それで今、仕事にも年齢的にも少し余裕が出てきたので、商売も大事だけど、人間の仲間である犬や猫が、人間の身勝手で捨てられたり、殺されたりする。この悲惨な出来事を何とかしなくちゃいけないと、ちょっと頑張ってみようと思ってるわけです。』

――今、何人くらいの方が、その運動に。

稲垣『一昨年は10人くらいだったんですよ。ところが今、400人くらいになりました。全国では約3,500人の会員がいます。私達の会は、人間のパートナーである犬や猫をはじめとする動物達の実験廃止を求めて活動をしているわけなんですが、平成3年から平成6年3月31日までの間に、動物実験の数は東海四県で11,521頭が3,845頭になり、7,676頭減りました。大きな成果ではありますが、意味のない残酷な動物実験が、人間の暮らしや健康に役立つ化学製品の開発という名目で、まだまだ行われているんですよ。』

――動物実験は減りつつあるということは聞いていましたが、それはやはり動物愛護の観点からですか。

稲垣『もちろんそうですが、それだけではないんです。何も実験で動物を殺さなくても、実験は他の方法でできるし、いろいろな問題があることもわかってきたんですね。私達が何気なく使ってる化粧品も、その安全性を確かめるためと称して、多数の動物が苦しめられ殺されている。しかもそれが、科学的に信頼性が薄い実験なんですね。じゃあ、苦しんで死んでいった私達の仲間はいったい何なんだということになるわけですね。』

――それも残酷な出来事ですが、さきほどおっしゃったように、人間の身勝手で捨てられた、犬や猫は、結局そのほとんどが殺処分か動物実験にされてしまうわけですね。これをいかになくすか。こちらも大変だと思います。

稲垣『ホントにそうですね。私達は実験動物を一刻も早く解放したいという思いでやってきたんです。その成果の表れでしょうか。保健所に持ち込まれる犬の数も、この1年半ほどで数千匹は少なくなったと、県の人から聞いております。大切なことは、多くの人達に、実験動物や、捨てられた犬猫達の悲惨な状況を広く知らしめることですね。その意味で、今年の3月に名古屋で行いました1週間のパネル展は、非常に効果的でしたし、反響も大きかったです。』

――新聞やテレビでも紹介されていましたね。パネル展を見ながら泣き出した人も一人や二人ではなかったとか。

稲垣『駅の構内で行いましたから、人通りが大変多かったのが良かったんですね。ボランティアの会員100名位の方達が、寒い中を熱心に呼び込みをしたり、チラシを配って戴いたり、又、本当にたくさんの方達に見ていただきました。はじめは時間つぶしでご覧になる方も、動物のあまりの状況に、これは、ということを気づいていかれるんですね。最後にはアンケート用紙のウラまでビッシリと自分の感想を書いてくださるんです。おかげさまで3,500名分のアンケートが集まりました。』

――どういったご意見が多かったですか。

稲垣『こんなヒドいこととは知らなかった、というのが多かったですね。中学生の女の子が「地球は人間たちだけのものじゃないのに！」と言ってましたが、ホントにその通りだと思います。実験の正視に耐えられない状況も、そうしたことをご存知ない方達にはさぞかし驚かれたでしょうね。けれども動物愛護センターの犬猫たちも、言葉を失うような扱われ方をされている県もあるのですよ。』

――私も昔、いなくなった自分の犬を捜しに保健所へ行きましたが、狭い檻の中で多くの犬が糞尿まみれになって、何ともいえない悲しい目をしてるんです。少し前まで人間に絶対の信頼と愛情を持って生きていたのに、なぜこうなるのかわからないといった不安と戸惑いにパニックになってるんですね。思

INTERVIEWER

花井　美紀

（株）コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。

わず扉を引き開けて、全部逃がしてやりたい衝動にかられました。ああいったことはまだ続いているんですよね。

稲垣『まだ続いてます。もっとヒドいかも知れません。先日も近県のとある市で殺処分をされる日の状況視察に行ったんですが、想像以上に悲惨でした。大きな麻袋がパンパンになるまで猫を入れるんですね。さわると固い。ギューギュー詰めなんてもんじゃないです。おそらく中の猫は、ガス殺される前に窒息死しているのもいるはずです。また、ほかの親子の猫が小さい箱にいれられる時、しがみついた子猫を係員が思いきり叩き落とすんです。親猫の淋しい目が忘れられません。犬も大変でした。6畳位の室に29匹が押し込まれ、座ることもできない状態なんですよ。そしてドロドロなのです。この様な状態のまま殺されていくのです。けれどもどうしてやることもできない。ホントにやり切れませんでした。』

――（目がうるんで声も出ない）。

稲垣『私達はこのような残酷な動物行政に対して改善の要望を出しているんです。一人でも多くの方が、知事への要望書を出してくださると有難いですね。』

――不要動物の殺処分というシステムは、すぐには廃止できないかも知れません。でも、処分する前のひと時を、せめて一週間でものばしてもらえたら、飼い主が見つかるかも知れません。何とかもっと快適に過ごさせてやることはできないでしょうか。殺される前に死ぬ以上の苦しみというのは、残酷という言葉でも表せない悲惨さですよねぇ……。

稲垣『人間の仲間なんですよ。パートナーなんですね。長い地球の歴史を共生してきたんです。心のうるおいとして、人間を支えて来てくれたんです。そのことに気づいてほしいですね。人間だけが快適に生きるために、仲間である動物を殺す。利益のためですとか、面倒になったからですとか。それではあまりに悲しいですね。』

――お仕事も大切になさりながら、そうした活動を熱心にやってらっしゃる社長の生き方そのものが、社会への啓蒙啓発につながると思います。大きな可能性を持った、若い力への応援も含めて、ますます頑張っていただきたいと思います。